

188 茶屋（2023 年 8 月 24 日）

パリから約 30 キロ南東のイエールに、印象派の画家ギュスターブ・カイユボット（1848-1894）が両親や兄弟とともに夏を過ごした邸宅が残されています。1860 年に父マルシャル・カイユボットが購入し、両親の死後の 1879 年に邸宅を売却するまで、カイユボット家が所有していました。敷地内には、家のほかに、オランジュリー（寒い季節にレモンやオレンジなどの柑橘類の木を生育させるための温室）、鳥小屋、礼拝堂、田舎風の家といった建物が点在し、敷地の脇を流れるイエール川と栈橋を通り過ぎると菜園が広がります。パリのブルジョワに相応しい美しい邸宅だと思いながら緑豊かな敷地内を散策していると、突如として和風の建物(写真右)が現れます。屋根付きの長椅子です。カイユボット邸のパフレットによると、旅人が休養するためのもので、日本が初めて参加した 1867 年の第 2 回パリ万国博覧会以降に建てられたと説明されています。



調べてみると、1867 年のパリ万博で、日本は茶屋を展示し、大変好評だったとする記録が残っていることが分かりました。茶屋とは、交通手段が徒歩に限られていた時代に、街道沿いに設けられた旅人の休憩所です。休憩場所を提供するだけではなく、茶菓又は料理を提供する茶屋や茶葉を売る茶屋もあり、今で言うならカフェ、レストラン又は土産物店に当たります。現代の日本では当時の姿を復元した茶屋（写真上）が、観光客に昔の旅人の気分を提供する場所として人気を集めています。カイユボット邸に残されている木造で茅葺屋根の長椅子は、簡易スタイルの茶屋を模したものと考えられます。



1867 年のパリ万博で展示された茶屋は、清水卯三郎という商人が、日本で実際に使われていた茶屋を分解して日本からパリまで運搬し、日本から連れて来た大工に現地で組み立てさせたものでした。清水卯三郎は、この時の万博に参加した唯一の日本人商人でした。茅葺屋根にヒノキ造りで六畳間と土間があり、建

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

物の周囲には日本庭園が造られたとされています。また、日本から芸者3名を連れて来て、着物姿の芸者たちが来訪客に茶菓を提供しました。右の絵は、1867年パリ万博時に清水卯三郎が建設した茶屋の内部の様子で、ル・モンド・イリュストレ（1867年9月28日号）に掲載されたものです（出典：フランス国立図書館電子図書館ガリカ）。



茶屋でくつろぐ人の姿は、浮世絵にも描かれています。歌川広重と溪斎英泉によって作られた浮世絵シリーズの「木曾海道六十九次」のうち、英泉が描いた「熊谷宿」にも茶屋が描かれています（写真左）。左には、長椅子に座って休憩する旅人とお茶を提供する女性がいます。左下の隅には、ひらがなで「あんころ」（あんこ）と「うんとん」（うどん）という文字が書かれた看板があり、あんこを使ったお菓子やうどんを提供する茶屋であったことが分かります。そして、中央には、籠に乗って新たに到着した旅人がいます。茶屋は、休憩場所を提供し、行き交う旅人の交流の場でもありました。

カイユボット邸の長椅子は、敷地内を見下ろせる少し高い場所にあります。この長椅子に座って、景色を見ながらカイユボットは何を考えたのでしょうか。